

味の素食の文化センター研究成果概要報告書

<2019年度研究助成>

19世紀後半における帝政ロシアへの インド茶の流通

中央ユーラシア地域の茶史の視点から

大阪大学大学院・山内瑞貴
2022年6月30日

<2019 年度研究助成>

19世紀後半における帝政ロシアへのインド茶の流通—中央ユーラシア地域の茶史の視点から—

1. はじめに

(1) 本研究の関心と目的

本研究は、19 世紀後半における英領インド産の茶（以下、インド茶）の中央ユーラシアへの販路拡大という事例を、既存の茶の世界史に組み込むことを目的としている。なお、本稿で分析の対象とするインド茶は、主としてインド亜大陸北部で生産された茶を指し、スリランカ産の茶はこれに含まれない。

イギリスは、19 世紀半ば以降、植民地インドで茶の生産を開始した。この茶は、やがて世界各地に販路を拡大し、中央ユーラシアへも流通するようになった。しかし、具体的にいつから、どういった経緯でインド茶が同地域に流通するに至ったかという点については、いまだほとんど明らかになっていない。

インド茶がイギリス本国や植民地に広がる過程は、本邦でも角山榮『茶の世界史』（中央公論社、1980 年）などが知られるが、そのほかにもアッサム地方での紅茶生産におけるプランテーションの経営者と労働者の問題や、ポスター広告による消費の喚起など、さまざまな側面から研究が蓄積している。いっぽうで、これらの研究のなかでのインド茶は、主にイギリスの海上交易の枠組みの中で語られてきた。中央ユーラシアは、豊かな茶文化の根付く、茶の一大消費地であるにも関わらず、インド茶に関する歴史研究のなかではほとんど扱われてこなかった。この時代、中央ユーラシアの中でも中央アジア（西トルキスタン）や西アジアに進出したロシアの茶貿易に関する研究は、その多くが中国（清朝）とのシベリアを介した交易についてのものであり（森永：2018）、インド茶の研究はほんの数例にとどまっている。また、この数少ない研究も、黒海沿岸の港を通じた海路で運ばれたインド茶に焦点を当てており（トムストン：1980、左近：2021）、インド茶の多様な流通ルートをも十分に描き出すことができているとはいえない。そのなかでも、ドミトリーエフ（2007）は、インド茶の陸路流通をロシアの茶商との販売競争の側面から描いているが、どのような集団がインド茶の取引に

山内瑞貴

（大阪大学大学院）

関わっていたのかなどの側面は検証が不十分である。

本研究は、中央ユーラシアの中でも、とくに中央アジア南部の都市・ブハラへのインド茶の流通に注目して、この問題を検討した。現在はウズベキスタンの都市であるブハラは、かつて中央アジア最大の商業都市の1つであり、当時ここを首都としたブハラ・アミール国は、帝政ロシアの対中央アジア貿易における最大の交易国であった（濱本：2019）。いっぽうで、ブハラは前近代よりインドとの陸上交易を行っていたが、この交易関係がロシアの中央アジア侵攻以降どのような状態にあったの

かという問題は、ほとんど検討されてこなかった。本研究は、インド茶のブハラへの販路拡大という事象から、この問題についての検討も行った。

そして、本研究は最後に、中央アジアの茶文化と、インド茶の流通の関係性についても検討を行った。インド茶が到来する以前より、シルクロードを通じて茶がもたらされ、豊かな茶文化が根付いていた地域に、新たなルートから茶がもたらされたことの意味を考察した。

(2) 研究方法

本研究では、史料の収集と比較を通じた歴史的な手法で調査を行った。

新型コロナウイルス（Covid-19）の感染拡大の影響により、本研究の調査は当初の予定より大幅な変更を迫られた。当初、本研究の調査にあたっては 2020 年中にイギリス・ロシアの文書館に訪問することを予定していたが、予定を変更し、2022 年 2 月にイギリス・ロンドンの大英図書館にてのみ史料の収集を行った。この史料は、2022 年 6 月現在も分析中である。また、イギリスへの渡航が可能かどうか不明であった 2020 年・2021 年中は、国内で収集できる史料でのみ調査を行った。

国内およびイギリスで収集した史料は、大きく

2 種類である。1 つ目は、英領インド政庁と帝政ロシアの貿易統計の史料である。このような種類の史料から、中央アジアに流通したインド茶およびその他商品の状況を数量的に明らかにすることを試みた。2 つ目は、19 世紀中頃から後半にかけて中央アジア一帯を旅行した欧米人の旅行記録である。これらの史料から、当時の中央アジアにおける茶の消費状況や、統計史料からは明らかにすることのできない交易の状況を、質的に明らかにすることを試みた。現段階までに用いた史料は、下記参考文献の欄に示すとおりである。

2. 時代背景

史料分析より明らかになったことを示す前に、調査対象の地域の時代背景を確認する必要がある。

19 世紀前半、中央アジアではコーカンド・ハン国が徐々に勢力を拡大し、清朝・帝政ロシア間の交易の中間利潤で財を成した。この際、中国からは絹や当時に加え、茶が輸出されたが、この茶はカシュガルなどの東トルキスタンの交通の要衝を経由し、ブハラにまで到達していた。1830 年代にブハラを訪れたイギリス人行政官・バーンズは、ブハラが、カシュガルやヤルカンドとの大規模な交易によって、緑茶を輸入していることを記録している (Burnes: 1839)。いっぽうで、コーカンド・ハン国の西隣、ブハラ・アミール国に拠点置く商人らは、通過税を徴収されないようコーカンド領を避ける形で、北西インドからカーブル (アフガニスタン) 経由して帝政ロシアに至る交易で、コーカンドとは別の重要な役割を占めていた (佐口: 1966)。

しかし、1860 年代頃より、コーカンド・ハン国が衰退期を迎え、同時に北方から帝政ロシアが南下を進めたことで、トルキスタン一帯は政治的混乱に陥った。この影響で、カシュガルとブハラを結ぶ茶の供給ルートが一時断絶の状態に陥った。また、帝政ロシアは西トルキスタン一帯に勢力を広げ、1868 年にはブハラ・アミール国を保護国とした。コーカンド・ハン国は、1876 年にロシア直轄領となった。

同じころ、インド茶は、1830 年代にアッサムで栽培が開始されたのを機に、徐々に栽培地域を広げていった。インド北西部においても、1840 年代にクマーウーン、カーングラなどの地域に茶園が開かれた。そしてこの茶が、中国からの茶の

供給が途絶えた中央アジアに浸透してゆくのである。

3. 調査結果

以下では、現段階までの史料分析を通じて得られた事実を項目ごとに示してゆく。

(1) 帝政ロシアによる制度整備

帝政ロシアは、18 世紀後半以降国境東側からキャフタを介して中国茶の輸入を行っており、国内の茶の消費量は増加傾向にあった。その後、1861 年に国境西側 (ヨーロッパ方面) からの茶の輸入解禁したことで、ロンドンを経由した茶、ロシアへ流入するようになった。1870 年代以降には、黒海沿岸のオデッサ (オデーサ) を経由するルートからも茶が輸入され、コーカサスもしくはオレンブルグを通じて中央アジアへと運ばれた。

そのようななか、1868年12月、ロシア元老院とブハラ・アミール国間で商業条約が締結され、相互間の貿易における税率が従価2.5%と定められた。また、同月に発令された帝政ロシアの特別法令 (第46549番法令) では、中央アジアにおける茶の取引について、以下の3点が定められた

(Полное собрание законов Российской Империи, обр. 2, т. 43, no.46549.)。

①トルキスタンに運ばれるロシアの茶 (キャフタ経由の茶とヨーロッパ経由の茶) に対する、あらゆる税を免じること。

②近隣のハン国からトルキスタンに持ち込まれたすべての茶に対し、キャフタのレート (1 プードにつき 15 コペイカ) に従って、重量ごとに、各地方のザカート 10 の価格以上で特別税を課すること。

③ロシア領トルキスタンからロシア帝国内へのあらゆる茶の輸入を、無条件に禁止すること。

帝政ロシアの法令の内容からは、キャフタ経由の茶の優遇と、それ以外の茶の締め出しを図る様子がうかがえる。

いっぽうで、別史料からは、この政策方針が必ずしも成功していない様子も見て取れる。たとえば、1873年にロシア・ブハラ間で締結された友好条約で、ザカート以外の徴税を禁止する条項

(第6条) が盛り込まれたいっぽうで、1875年に、ロシアの茶商らが、在地の支配者たちが違法な仲介料をロシア製品に課しているとの不満を述

べたとされている。

1881年以降は、帝政ロシアがインド商品のロシア領トルキスタンへの持ち込み禁止踏み切ったものの、この制限はロシアの直轄領にのみ適用されたため、保護国のブハラは含まれなかった。

1884年のモスクワの官報には、インド茶が関税を課せられているにも関わらず、ブハラやフェルガナに流れ込んでいることを述べている。そのうえで、「辺境の性質と範囲のために、秘密の輸入を防ぐことは非常に困難である。」と述べている (O'Connor: 1884)。

以上のように、帝政ロシアによる制度整備が1860年代以降進められつつも、実態は在地の支配者による“違法な”徴税が行われ、かつインド茶が「秘密の輸入」で中央アジアに運ばれていたことが明らかになった。

(2) インド北西部の茶園からの輸出

1883年にインド北西部のパンジャーブ地域で発行された官報には、1872年当時北西インドでの任務に就いていた、インド陸軍ウィリアム・パスク中佐 (のちに少将) の証言がまとめられている。パンジャーブ地域の都市・カーングラでは、1860年頃から茶の生産が始まっていた。パクスは、中央アジアの市場を、カーングラにて生産された茶の重要な販売先の一つとして挙げたうえで、カーングラに茶を買い付けに来る商人の内訳を証言している。パスクによれば、インド北西部都市・アムリトサルからやってくる在地の商人と、ヌルプールからやってくる一人か二人の商人は、各年の特定の時期になると、プランテーションにやってきては、紅茶の粗悪なもの、緑茶を大量に買い付けていくと報告している。特に緑茶は、中央アジアの市場向けのものであり、これをカーングラの茶園から運んでいるのはアムリトサルの商人であると述べている (Punjab Government: 1883)。アムリトサルは、パンジャーブ地域における交通の要衝であり、アムリトサルの商人らは、ペルシア湾や中央アジアへ至る流通ルートの中での交易に従事していた。

パスクの証言からは、中央アジアへはインド北西部で栽培されていた緑茶が輸出され、かつその輸送を担っていたのは在地の商人 (アムリトサルの商人) であったことが分かる。

では、アムリトサルの商人は茶をどこまで運ん

でいたのか。

表1は、各地に陸路を通じて運ばれた茶の量を示している。

表1 各地に陸路で運ばれたインド茶の輸出量

地名		1881-82	1882-83	1883-84
カーブル	量	333,760	250,768	417,312
	価格	248,450	139,286	162,293
カシュミール	量	200,704	178,864	201,040
	価格	156,860	139,315	144,250
カンダハール 鉄道の越境	量	18,816	28,112	77,168
	価格	13,680	20,520	56,280
ラダック	量	46,928	58,464	49,504
	価格	27,915	20,640	15,050

(単位...量: 重量ポンド、価格: ルピー)

出典: O'Connor (1884), p. 27.

表1に示される通り、アフガニスタンの都市・カーブルには、相対的に多くのインド茶が輸出されていることが分かる。カーブルは、パンジャーブ地域の商品が多く輸出されていた都市であり、1881年にはパンジャーブ地域における総貿易額のおよそ半分がカーブルとの取引額を占めていた (Hamilton: 1882)。

以上の点をあわせて考えると、インド北西部で生産された茶は、アムリトサルのような交易の要衝を介して、カーブルに運ばれたことがわかる。また、生産地から、中継地アムリトサルまでの茶の流通を担ったのは、多くがアムリトサルの在地の商人であった。いっぽう、中央アジアの茶の集散地であるブハラの商人が、直接茶園に買い付けにやってくるのは、まれなことであった。

では、結局のところ、インド茶をブハラまで運んだのは誰であったのか。

当時のペシャーワル副弁務官 (Assistant Commissioner) であったローレンスは、アフガニスタンを経由するインド茶貿易の情報をメモにまとめている。これによると、インド茶の輸出に従事していた商人は、ペシャーワルに拠点を置くムスリム系の商人であり、彼らは英領インド北西部で生産された茶を、ブハラまで平均3-4か月かけて運んでいたという。また、ブハラに到着した茶は、そのほとんどがサマルカンド、タシュケ

ント、コーカンドなど、他の場所から来た商人によって買い占められ、他の地域で消費されていることが記されている (O'Conor: 1882)。

表 2 は、アフガニスタン (カーブル) を通じてブハラに運ばれた茶の量である。

表 2 アフガニスタン経由で運ばれたインド茶

年	インド茶	インド以外の茶
1878-79	582,848	675,360
1879-80	234,976	875,952
1880-81	691,152	1,339,520
1888-89	837,648	1,066,800
1889-90	887,824	1,050,672
1890-91	703,920	784,336
1891-92	375,536	879,536
1892-93	152,880	597,968
1893-94	150,528	388,864
1894-95	175,280	155,792

(単位: 重量ポンド)

出典: 1878-80: O'Conor (1882), p. 24. / 1888-1890: Watt (1893), p. 466. / 1890-1896: O'Conor (1896), p. 77. より作成。
 なお、Watt の史料は cwt (ハンドレッドウェイト) で記載されていたが、すべて 1cwt = 112lb. に換算しなおした。

以上の記録を踏まえると、インド茶の中央時アへの輸出はおおよそ次のように行われていたとまとめることができる。北西インドで生産された茶は、主として北西インドの在地商人 (アムリトサル商人) によって買い付けられた後、アムリトサルなどの交易の要衝を経て、アフガニスタンのカーブルに運ばれる。カーブルに運ばれたインド茶は、その後、ペシャーワルの商人の手によって、中央アジアの茶の集散地であるブハラに運ばれる。ブハラに運ばれた後は、各地の商人が茶を買い上げ、再び中央アジアの諸都市に運ばれてゆく、といった流れである。このことは、前述のブハラの商人が用いた 19 世紀前半以前の商業路が、依然として機能していたことを意味している。

帝政ロシアの政府調査官であったスポーチンは、1892 年に著した著書の中で、ロシア領トルキスタンへのインド茶の広がりについて証言している。スポーチンは、インド茶はイギリス人によって以前よりも大量に輸入されており、トルキスタン南部の人口の大部分は中国茶よりもインド茶を好ん

でいると証言しており、ここからも保護国でロシア側の規制が比較的緩い状況になったブハラなどの南部から、インド茶が中央アジア一帯に広がる様子が示されている。

(3) 中央アジアの茶

最後に、中央アジアにおける当時の喫茶習慣の実態を史料から確認した。

この時代の事例を見てゆく際には、ハンガリーの言語学者・東洋学者ヴァーンベリーの旅行記が有用である。彼は、公共空間における彼らの暮らしを研究するには、まずすべての階級の者たちにとっての憩いの場である茶屋を訪れなければならないと述べる。そのうえで、ブハラではすべての者が茶を詰めた小さな袋を持ち歩いており、店に入る際には、この中から店主に一部を渡す様子を描いている。店主の仕事は茶を扱うというより、むしろお湯を扱っているようであり、とくに公共空間においては、日中に飲まれる茶は緑茶のみであり、それに砂糖は入っておらず、小麦粉と羊の脂からつくられる小さなケーキなどを 1-2 個添えて提供される、とヴァーンベリーは続ける (Vámbéry :1868)。

同じころ、イギリス在サンクトペテルブルク領事館・駐在員ラムレーは、ブハラのマーケットの茶商 (中国人?) が取り扱う茶を、大きく以下3つの種類に分けて紹介した (Lumley : 1869)。

- ①キルクマ (Kyrkma) などの種類は、ヨーロッパやペルシアで売られており、中国や中央アジアではめったに見かけない。
- ②カラ・チャイ (Kara Tchai.) などは磚茶であり、塩とクリームを加えて朝に飲む。
- ③シバグル (Shibaglu)、ロンカ (Lonka) などすべて緑茶であり、中国北部および中央アジアではこれ以外好まれない。ロンカは最も高価。

他の旅行者の記録なども併せて考えると、中央アジアの中でも特にブハラでは朝に磚茶をスープのように飲み、日中は主として緑茶を抽出式で飲んでいたことが分かる。このことから、北西インドの茶園から運ばれた茶が主として緑茶であったというパスクの証言は、ある程度説得性をもっていることが分かる。加えて、インドの生産者側がある程度このような中央アジアにおける喫茶習慣の実態についての情報を得ていたことが推測できる。

また、この地域における茶の飲み方は、ここでは紹介しなかった史料も合わせると、民族や集団ごとに微妙に異なる様相を呈していることが窺えた。とくに遊牧民の間では磚茶が好まれたようであるが、彼らの喫茶の方式が、定住民の磚茶の飲み方と同じであるかという問題などについては、今後さらに検討が必要である。

4. おわりに

本研究で行った文献調査からは、帝政ロシアが、トルキスタン領へのインド茶の進出を阻止するような動きをみせているものの、少なくとも1860 - 1880年代には成功せず、インド茶が、この間に在地商人らのネットワークを通じて、ブハラを含めた中央アジアに輸出されたことが明らかになった。また、当時の中央アジアにおける喫茶習慣についての記録からは、インド茶の生産者側がある程度の現地の消費状況に関する情報も得ていたか可能性があることが示唆された。

これらの事実からは、帝政ロシアにも英領インドといった「国家」に組み込まれない、近代中央アジアの人的ネットワークが浮かび上がる。インド茶は、このような集団の手を介して中央アジアに広がっていったのである。

今後は、収集できた史料をより深く分析することで、さらに議論の精度を高めてゆくことが求められる。また、今回収集した史料からだけでは論証が十分にできないが、推測される事象については、今後別の史料を収集することで明らかにしてゆく必要がある。そして最後に、このブハラを介した中央アジアへのインド茶の流通が、報告者が本来研究の対象としている、より広い地域概念である中央ユーラシアにおけるインド茶の流通のなかで、どのように位置づけることができるのかを、考えてゆきたいと考えている。

新型コロナウイルスの感染拡大、およびロシアによるウクライナ侵攻に、今後もこの研究は大きく影響を受けることが想定される。しかしながら、今回得られた研究結果をもとに、可能な限り実態の解明を進めてゆきたいと思う。

参考文献

一次文献

- Burnes, A. (1839) *Travels into Bokhara*, London
Hamilton, R. E. (1882) *External Land Trade of British India for 1881-1882*, Calcutta?
Lumley, M. (1869) *Report on the Tea Trade of Russia*, Calcutta
O'Connor, J. E. (1882) *The External Land Trade of British India for 1880-81*, Calcutta
— (1884), *Review of the Trade by Land of British India with Foreign Countries for the Year 1883-84*, Simla
Punjab Government (1883), *Gazetteer of the Kangra District*, Calcutta
Vámbéry, Á (1869) *Sketches of Central Asia*, London
Субботин, А. П. (1892) *Чай и Чайная Торговля*, СПб

二次文献

- 佐口透 (1966) 『ロシアとアジア草原』吉川弘文館
左近幸村 (2020) 『海のロシア史』名古屋大学出版会
角山榮 (1980) 『茶の世界史 緑茶の文化と紅茶の世界』中央公論新社
濱本真実 (2019) 「タタール商人の新疆進出」
野田仁・小松久男 (編) 『近代中央ユーラシアの眺望』山川出版社：208-227
森永貴子 (2018) 「1860年代以降におけるロシアと清の茶貿易 モスクワ、キャフタ、漢口を結ぶ流通の視点から」『北東アジア研究』別冊第4号：101-124
Thompson, S. (1980) 'Russia's Tea Traders: A Neglected Entrepreneurial Class', *Renaissance and Modern Studies*, vol. 24(1), Colombia: 131-163.
Дмитриев, С.В. (2007) 'Китайский и Индийский Чай в Средней Азии Последней Трети XIX В. (По Архивным Материалам)', Иванова, Е.В.(ed.), *Проблемы общей и региональной этнографии*. СПб. 2007: 281-286